

図書館総合展フォーラム「次世代電子図書館を探る」
のための話題提供
(2011.11.11 パシフィコ横浜)

「電子辞書と電子リソース」 と教育・研究とのかかわり

京都大学附属図書館研究開発室
古賀 崇

tkoga@kulib.kyoto-u.ac.jp

http://researchmap.jp/T_Koga_Govinfo/

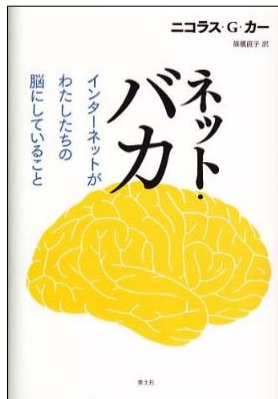
1

論点としたいこと

- 辞書・事典・論文のDBなど、「電子リソース」の普及・発展のもとで、
- 「知のあり方」はどのように変わっていくか？
どのような「知のあり方」が望ましいか？
- 「知のあり方」を教育の面、図書館活動の面でどのように提示していくべきか？

2

手がかりとして...



- ニコラス・G・カー(篠儀直子訳)『ネット・バカ: インターネットがわたしたちの脳にしていること』青土社, 2010.(原著2010)
- 単なる「ネット批判」ではなく、「メディアの技術的变化」と「脳(認知)の機能の変化」との関係を問う

3

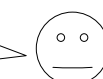
「知」や「能力」への見方 (『ネット・バカ』p. 158~)

- 従来理解されてきた意味での識字能力は、社会を構成する力とは、もはやなりえない
- ウェブのあらゆるところで接続し、あらゆるものと近接する世界=絶えず流動するコンテキストのなかで生じる意味を発見することが、最大のスキルである世界
- 教師も生徒もこの世界に参加すべきとき



トロント大の研究者

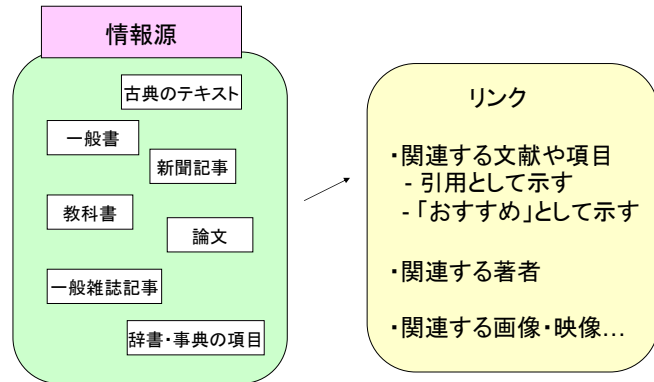
注意散漫状態での思索
を“よし”とすべきか？



著者(カー)

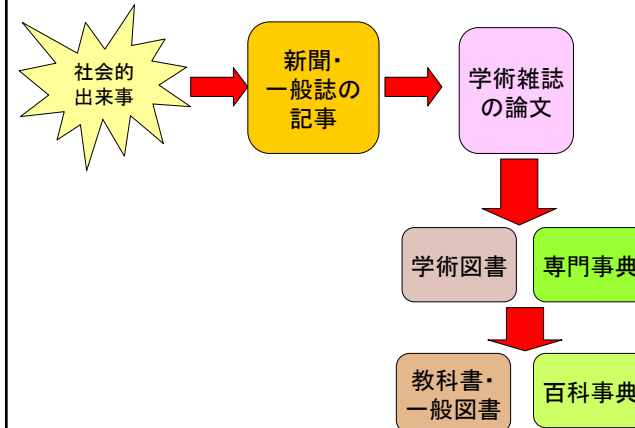
4

「絶えず流動するコンテキストのなかで生じる意味を発見」するための土台は？



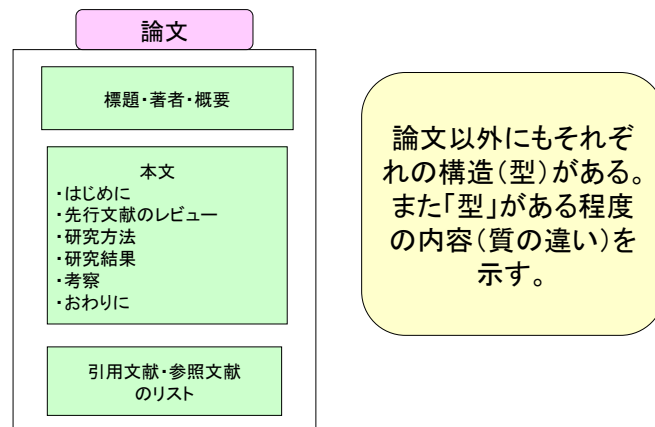
5

「情報源の構造」(1)時間の経過



6

「情報源の構造」(2)種類ごとの構造



論文以外にもそれぞれの構造(型)がある。また「型」がある程度の内容(質の違い)を示す。

7

宣伝



- 小山田耕二・日置尋久・古賀崇・持元江津子『研究ベース学習』(コロナ社, 2011)
- 「初年次教育」のためのテキスト。全5章+付録(授業の実例)
- 古賀は4章「学術文献の探索と評価」を執筆
- 「情報源の構造」を意識

8

「知のあり方」をめぐる問い(の例)

- 「電子の世界で直感的に示すこと」(リンクやランキングなど)

と

「知の構造・蓄積」

との関係は？

- コンピュータやデバイス上での提示の工夫

vs

教える側・教わる側に作業させ、考えさせる必要性

9

おわりに

“グーグルをはじめとする検索エンジンやデジタルライブラリに対するリテラシー教育は、[引用者注:グーグルブックスの]プロジェクトに参加している大学のみならず、広く図書館や高等教育のかかえる関心ともなっている。だがそれは単なる「探し方」の技術教育であってはならない。探す技術そのものの成り立ちや制約をこそまず知る必要があるのだ。”

和田敦彦著『越境する書物:変容する読書環境のなかで』新曜社, 2011, p. 124.

10